
僕らの失恋日記

河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの失恋日記

【Nコード】

N8965M

【作者名】

河童

【あらすじ】

失恋を続ける見守る主人公が体験したちよつと怖くて、それを打ち消すほどの明るさがある日常を描いた変な物語

（前書き）

三分の二はコメディーです。
カテゴリー詐欺注意

化け物？いるわけねー。それよりも今ある勉強の壁の方が怖い。
そう思いながら必死で勉強に励み、ギリギリで赤点を乗り越えた
高校二年生の夏。期末テストを間一髪で逃れた俺に待っていたのは
きらびやかな理想とつらい現実だった。

「何故俺たちには彼女がいらないんだ」

「顔が悪いからだろ」

友人である木村に適切なつつこみをいれる。リア充核爆発しろ、
それが彼の口癖だ。俺もその考えは同意できる。だが、俺は脳内彼
女で満足しているからそんなこと言うほどのことでもない。

「そこで提案なんだが、今度プールにでも行かないか？」

「大体理由は分かるが、何でだ？」

「ナンパのために決まってんだろ。今年の夏こそ成功させて彼女を
ゲットしようぜ！」

木村はご覧のとりのダメ男である。中学に入ってなんだかんだ
で仲良くなつて今に至るわけだが、同じような台詞を今まで何度聞
いたことだろうか。成功していればいいのだが、いまだに『彼女い
ない暦Ⅱ年齢』を崩せないでいる。

「もういいよ。お前は頑張ったよ。だからもう伝説を更新するのは
やめとけ」

木村にはとある伝説がある。

伝説が始まったのは中学校に入って間もない頃だった。

中学校の屋上は立ち入り禁止で誰もいないことをいいことに社交
性のない俺は屋上で飯を食っていた。すると木村が突然来て空を見
上げて言った。

「俺、好きな子ができたんだ」

これが全ての元凶だった。それ以来彼は告白を続け見事に散っていった。

彼が惚れた女子は数え切れない。彼を愛した女子は一桁も行かない。泣いた喚いた叫んだ彼を俺は何度も見てきたが。彼の精神力は尋常ではなくフラれた次の日にはまたフラれていた。

ついでに木村は最初に好きになった女の子にその日の内に告白し、その日の内にフラれた。

彼につけられたあだ名は『フラレ王』

誰しもが蔑み忌み嫌う王として頂点に立っていた。

木村は実は顔が悪いわけではない。ただあまりにも告白の量が多く、浮気者として悪名高いからフラれるのだ。本人はそれに気づいていないのが涙をそそる。

俺は教えないが。

「俺は今度こそやってやるぞー！」

お前の噂は町内どころか、ネットで世界へ配信されているからもう無理だと思うんだけどな。まあ楽しければいいか。

「まあ頑張れ」

他人事なので他人事のように手を振っていると、木村はその手を掴んできた。

「何言ってるんだ？お前も行くんだよ」

「はあ？」

「俺一人じゃ寂しいだろ？」

「知らねーよ。勝手に朽ち果てて逝け」

「相変わらず毒舌だねー。そんな冷たいこと言わないでさ、ちょっとしたバカンス気分で行こうよ」

しつこく誘ってくる木村に対し俺は断固として拒否していると、他のバカどもが集まってきた。

「なにに、ナンパしにくいの？」

「そういうことなら俺たちにまかせな。百戦錬磨の俺たちにかかればナンパをすることなんて空気を吸うようなものだ」

彼らは山田と斉藤、同じクラスのチャラくはないが真面目ではない、いたって普通のダメな男子高校生だ。

「でもお前ら百戦惨敗じゃねーか」

実はこの二人、木村に続くフラレ回数を持っていて、サイトではフラレ王の右腕と左腕と呼ばれていて、木村と同じ理由で成功していない。

百戦で培った知識や経験も人の噂の力には勝てなかったのだ。

「そんなことはどうでもいい。今度こそは成功させるぞー！」

「「おー」」

「んじゃ頑張つて。行つてらっしゃい」

俺が三人を見送ろうとすると、いつの間にか縄で拘束されており寮の外へと引きずりだされた。

数時間後

「俺と付き合ってください！」

「いやです」

「僕と付き合ってください」

「拒否します」

「俺と付き合ってください」

「ごめんなさい」

俺は見事に三人が散っていくのをプールの隅で眺めている。

予想はしていた。いや、この状況しか予想していなかった。

だが、さすがにここまで散っていくと同情してしまうな。もうこのプールでコクつてない女性はいないんじゃないか？

それからバラけたり一緒に行動をしたりと三人は作戦を変えているようだった。だが、実は実らず……。

「おっ、戻ってきたか」

戻ってきたが、全員目が死んでいる。プールで遊んでいる女性全員がこちらを指差して笑っているのが見える。今の彼らには拷問だろう。

「そろそろ引き上げるか？」

俺がそう言うのと三人は力なく頷いた。いつものことだから気にしないが、今回はけっこうきているようだ。

その夜は盛り上がった。三人とも涙涙でジュースを飲みながら自分の情けなさに嘆いて今日の出来事を愚痴った。正直言っただうでもいい話だが。

「みんな死ねばいいのに。あるいは死にたい」

「何怖いこと言ってるんだよ。フラれるなんていつものことだろ」

「簡単に言っつなよ。それでも僕たちは必死でやってるんだぞ」

涙声で山田が言う。

見えていて必死さは伝わるんだが、次々に告白していくので説得力に欠けるのがこいつらの残念なところだ。

「ちくしょう、次こそは」

フラれた後の木村の口はいつもこの言葉を出す。

俺はこんなバカ野郎どもを見直している事が二つある。一つはこうして前向きに行く姿勢、二つ目は自分らをフツた女の悪口を決して言わないことだ。

この時を見てるとつい応援したくなっちまう。

次の日

「遊園地行こうぜ！」

結果 惨敗

数日後

「海に行こう」

結果 惨敗

十数日後

「キャンプに行こう」

結果 惨（ry

ついにお盆の日までやってきた。

夏休みも終盤に差し掛かり成果は絶望的な状況。

「もう、心が折れました」

「何を言っているんだ！俺たちはまだ生きている。望みを自ら絶つな！」

「僕は今まで一体何を……」

「寝るな、目を覚ませ！お前には見えないのか、成功という光が！」
「いや、いい意味で目覚めてるだろ」

「木村、あとは、任せた……」
「斉藤おおおおおおおお！」

お盆のためほとんど帰省して静まっている寮で俺たちはちょっとした劇をやっているわけだが、これが案外つらいものがある。だつてフラれ続ける男たちの物語だよ？悲しすぎるだろ。

夏休みを遊ばず恋に全てを掲げた男たちの戦い。

『失恋戦記 ガイアの目覚め』近日制作予定

嘘の宣伝まで作りこいつらは一体何をやっているのだろうか。

そういえばまだ宿題終わってないな。

「そろそろ夏休みの宿題を始めたほうがいいんじゃないのか？」

「バカ野郎！このままでそんなことやれるか！俺たちはまだ戦える！そうだ、最後の切り札が残っているんだ！」

「で、その最後の切り札ってのは何だ？」

俺はこいつの口から最後の切り札という言葉を三十八回聞いたことがある。

「お前はつり橋効果というのを聞いたことがあるか？」

「お前の口から二十三回聞いたことがある」

簡単な説明

危機的状況なのに愛が芽生えることをつり橋効果という。（適当）

「今回はちゃんとした作戦だ。ここから電車で一時間、徒歩で三十分のところには有名な心霊スポットがあるんだ。そこへ行って女の子を怖がらせて男を見せようって作戦だ。つまり、肝試しをやるぞ」

明らかに無理があるな。

「そりやいいアイデアだ！」

目の前が真つ暗な奴はどんなに小さい光だろうと頼ろうと近づいていく。たとえそれが地獄の業火だとしても。

「飛んで火にいる夏の虫ってこんな心境なのかねー」

俺はただ盛り上がる三人を遠めで見ているだけだ。

まったくバカな奴らだ。

「お前らつり橋効果に誘える女の子いるのか？」

「当たり前だ。だてに何度もフラれてたわけではない。メルアドくらい教えてくれた娘もいたさ」

「ほー意外だな」

「じゃあ全員最低一人は連れてこいよ」

「それって俺も入っているのか？」

「もちろん」

ですよねー。

肝試し当日

俺たちは心霊スポットらしきトンネルに来ている。

「で、これはどういうことだ？」

俺は小学校からの幼馴染である鈴木咲を連れてきた。オカルト好きなため肝試しやると言ったら快く来てくれた。

これでここに集まったのは俺、木村、斉藤、咲の五人。予定してた人数と違うような気がするな。

「おい、最低一人連れてくるって言ったのは誰だ」

俺がドスのきいた声で言うと三人は汗を流しながらきよどる。

「これには訳があつて」

「ほら、みんなお盆で帰ってるし」

「すみませんでした」

三人とも目が泳いでいる。ここまでくると怒りより哀れさが優先されるな。

「まあいい。じゃあ早速肝試しをするわけだが、どうするんだ？」

「それは決めているよ。百物語をするんだ」

「『百物語？』」

四人の声が重なる。

「おいおい、怖い話なんて何も知らないぞ」

咲が知らないのは仕方ないとして、四人全員が何をやるのか知らないなんて逆に驚きだ。

「大丈夫。そんなこともあるつかと実家の爺ちゃんの部屋から去年こんな本を持ち出してきているから」

そういつて見せてきたのは古い書物だった。タイトルに『恐』とあるので怖い話には間違いなさそうだ。

「何でトンネルで怖い話しなきゃいけないんだ？」

俺がそう言っているうちに木村たちは咲に告白を始めようとしていた。

「俺の話を聞けー！」

三人に鉄槌を加え、話を進める。

「ロウソクはめんどくさいから無しで、トンネルの中間地点でやることにします。心霊スポットだし、こういうことをやれば何か出るだろうと思ひまして」

こうして斬新な百物語が始まった。

「最初誰話す？」

「じゃあ俺が」

俺は一番最初に手を上げた。こういうのは最初の出だしが肝心だ。

「本は使う？」

「いや、いい。話すことは決まっているから」

俺はそう言い、頭で話を整理した。

『これは知り合いから聞いた話なんだけどさ』

場が静かになり本当に怖い話をしているんだなという実感がわく。

『Aとしましょうか。Aさんはある日見も知らない男子生徒に告白されて慌てて考えさせてくださいって言っちゃったらしいんだ。その夜ずっとそのことを考えていてね、ついに了承しようと思ったんだって。けどその男子生徒はその日学校に来てなくてね、ちょっと残念だった。』

で、その日は部活があって帰るのが遅くなったらしいんだよ。薄暗い道を怯えながら帰っていると、公園から声がしたんだって。こんな夜に誰かいるの？と疑問に思っただけで覗いてみると、

今日は来てなかった男子生徒が小学生に告白してたんだってさ』

全員頭に『？』が浮かぶ。そりゃそうだ怖いのは最後だからな。

「木村、お前ロリコン？」

俺のその質問で静かな空間が全て凍りついた。誰かが「こわ……」ともらす。

「えっ、何で今それ言う？何で今それ言った？」

「俺、怖い話ってこれしか知らなくてね」

「ちげーから！百物語でそういう怖さもとめてないから！」

必死で叫ぶ木村を他の三人は軽蔑の目線を送っていた。

「じゃあ次は誰？」

俺がきくと木村が静かに手を上げた。

「ふふ、この本の怖さを見せてやるよ」

木村はおもむろにその本を開いた。そしてそのまま固まった。

「どうしたんだ？」

俺が恐る恐る本の中身を見てみると、文章が全て達筆な文字で書かれていた。

「……まさかこれ読めないのか？」

その言葉に反応したのか木村の身体がビクンツと跳ね上がる。そうだ、こいつに鉄槌を下そう。

こうして百物語は中断された。

「次何やるの？まさかここまで来てまさか止めるの？」

咲が強気で言う。オカルト好きな彼女にとって百物語を中断したのはよほどかんさわったのだろう。

俺を含めた四人を気まずさを感じ、斉藤が苦し紛れに紙とペンを取り出して言った。

「こっくりさんをやるう」

こうして新たにトンネルでやる斬新なこっくりさんが始まった。

「こっくりさん こっくりさん おいでなさい」「」

少し強気にこっくりさんと呼び出すと、十円玉は真ん中の社のほうへ動いた。

「来るとは思わなかった」

咲が少しうれしそうに言う。

「誰から質問する？」

「じゃあ俺」

今度は木村が最初に手をあげた。

「こっくりさん こっくりさん 俺にいつか彼女ができますか？」

こいつに恥つてものはないのか？

そう思っていると。十円玉は勝手に動き出した。

『む・り』

「無理？いいじゃなく無理！？」

木村の目が点になる。希望を完全否定された木村にはもう魂は残っていないようだ。

その後斉藤と山田も同じ質問をして『む・り』と応えられた。

「こんなもんやってられっかー！」

俺が質問をしようとすると、木村が突然叫びながら十円玉から手を離れた。

「お前何やってんだ！？」

「うるせー。どうせお前が動かしてるんだろ！」

どうやら今までのストレスが一気に爆発したらしかった。

「！？」

木村のサプライズで驚いたのはもちろんだが、四人は別のことで声を失った。

「木村、絶対に後ろを向くなよ」

俺は怒る木村に静かにそう言う。

木村の後ろに、いるはずもない六人目の影があるのだ。その影は木村の影の首を絞めるように重なっている。

「何なんだ？」

木村は愚かにも後ろを向こうとすると、その影は次第に実体化していた。

「これは……」

木村が完全に後ろを向いた時には、影は幼い少女に変わり、木村の首を絞めている状態になっていた。

「ひっ！」

全員が小さな悲鳴を上げる。

だが、そんな状況にも木村は冷静な顔をして少女を見つめている。

「き、木村？」

俺は驚いた。木村が少女を抱きしめているのだ。そして優しく語り掛ける。

「怖かったのか？さびしかったのか？だがもういい。俺が全部許そう。全部補おう。好きだ、付き合ってくれ」

木村の言っている意味がよく分からない。少女も動揺して首から手が離れる。

「俺がロリコンかときいたな。あえて言わせてもらおう、俺はロリコンだと」

絶句した。こんな状況でこいつは何を言っているんだ？

「ここでお別れだ諸君。早く行け！」

木村がそう言ったのと同時に俺たちは走り始めた。もう何がなんだか分からない。だが感じたのだ。恐ろしい恐怖を。

後ろからまるで闇が襲ってくるように感じる。木村の姿はもう見えない。代わりに無数の腕が伸びていた。

「に……がさ……ない」

突如前に二人の髪の毛の長い女性が現れた。明らかな怨霊だ。

「くっ、ここまでか！」

俺が足を止めようとすると、山田と斉藤が「ヒャッホーイ」と奇声を上げて二人の怨霊に飛び掛る。

「さあここは任せていくんだ！足を止めるな！」

「絶対に振り向かないで走れ！俺たちは最後の告白をする！もう怨霊だってかまわない！」

もういやだこいつら！

俺は友との別れを交わし、走り続けた。後ろからはもう木村達の声は聞こえない。

ちくしょう、何だってこんな場所でこっくりさんや百物語なんてやったんだ！

「生きてるか？相棒」

「ああ、もうダメっぽいな」

「今振り返ると楽しかったな。彼女できなかったけど」

「ああ、楽しかった。彼女できなかったけど」

「それにしても木村はすごかったよな。まさか幽霊に告白するとは」

「あれはすごかった。俺たちも真似してみるか？」

「いいね。どうせ最後だし成功させるぞ」

「おう！」

しばらく走り続けて俺たちは外へ出た。

もう朝を迎えていて日が目に染みる。後ろを向くと普通のトンネ

ルが口をあけているだけだった。

「何だったんだ？全部夢か？」

夢であってほしかった。だが、ここに木村達の姿はなかった。

「変な人たちだったわね」

咲がそう呟く。

「ああ、変態だった。けどさ、いい友達だったよ」

俺は涙がこみ上げてきた。あんな奴らでも、俺の青春のほとんどの記憶に残っているんだ。楽しい思い出がいっぱいだったんだ。

泣いていると、一枚の紙が落ちてきた。

それはトンネル前で記念に撮った写真だった。まだ現像してないのにまるで今印刷したような暖かさがある。

写真には最初にいた俺たち五人の他に、木村の横で笑顔でいる少女と山田と斉藤に挟まれるように髪の毛の長い美人な二人の女性が笑ってこちらを見ていた。

裏にはこう書かれていた。

『彼女できたぜ！』

（後書き）

怖かったですか？面白かったですか？

楽しんで暴走して書いた結果がこれです。

楽しんで読んでいただけたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8965m/>

僕らの失恋日記

2010年10月8日11時44分発行